

# 万城目学『悟浄出立』考

— 「悟浄出立」「趙雲西航」「虞姫寂靜」にみる故郷喪失者たちの物語—

箕野 聡子

## 1. はじめに

直木賞受賞<sup>1</sup>作家である万城目学は、現実にある地域をモデルに作品を描くことを得意としている。デビュー作『鴨川ホルモー』<sup>2</sup>（2006年）から『とっぴんぱらりの風太郎』<sup>3</sup>（2013年）までは、ほぼ連続して関西が物語舞台に選ばれ、話題を呼んだ。

その万城目学が、地域へのこだわりをはずした作品への挑戦を試みたのが、『悟浄出立』<sup>4</sup>としてまとめられた5編の短編小説である。「悟浄出立」<sup>5</sup>、「趙雲西航」<sup>6</sup>、「虞姫寂靜」<sup>7</sup>、「法家孤憤」<sup>8</sup>、「父司馬遷」<sup>9</sup>。いずれも中国に題材をとった小説である。

同世代作家の森見登美彦に『新釈 走れメロス 他四篇』<sup>10</sup>があるように、これらの作品は、先人の描いた物語に寄り添うように世界観が形作られ、その先を見通すように描かれる。本論では、まずは万城目学が先人からうけとったバト

ンをどのように『悟浄出立』において繋げ、新たな物語を紡ぎだしたのかを明らかにしたい。

## 2. 「悟浄出立」

文庫本<sup>11</sup>の「序」において、万城目学は「悟浄出立」の執筆動機について次のように語る。

「高校時代、現代文のテストにとんでもなくおもしろい文章が出題された。天竺への取経の旅の途上にいる、三蔵法師と孫悟空と沙悟浄と猪八戒が登場する話だった。なるほど『西遊記』ではないかと思いきや、そうではない。沙悟浄が何やら考えている。ひとりウンウンと唸りながら、悟空の天才性について、三蔵法師の眼差しの先にある永遠性について、やたら難しい言葉を使って考察している。何だろう、この変だけど、とてつもなくおもしろい話は——」

後に万城目学は、この物語の作者が、中島敦であったことを知る。1942年に、『わが西遊記』<sup>12</sup>（「悟浄出世」・「悟浄歎異（沙門悟浄の手記）」）の二編を書き上げた中島敦は、三十三歳の若さでその年、この世を去ってしまった。

「永遠に読めないあの話の続き」を、自分で書こうと考え、タイトルを「悟浄出立」とし、中島敦がすでに書いた「沙悟浄が悟空と三蔵法師を考察する話」に続く物語として、「沙悟浄が猪八戒を考察する話」を書くことを決めたというのだ。つまり、この作品は、原典の『西遊記』からではなく、中島敦の『わが西遊記』の続きとして書かれたといえよう。

<sup>11</sup> 万城目学『悟浄出立』（新潮文庫、2017年）

<sup>12</sup> 中島敦『わが西遊記』（『南東譚』今日の問題社、1942年）

本文の引用は、『中島敦全集 2』（ちくま文庫、1993年）に拠った。

<sup>1</sup> 万城目学『八月の御所グラウンド』（文藝春秋、2023年8月）で、第170回直木賞を受賞。

<sup>2</sup> 万城目学『鴨川ホルモー』（産業編集センター、2006年）

<sup>3</sup> 万城目学『とっぴんぱらりの風太郎』（文藝春秋、2013年）

<sup>4</sup> 万城目学『悟浄出立』（新潮社、2014年）

本文の引用は、上記に拠った。

<sup>5</sup> 万城目学「悟浄出立」（「yomyom」vol.10、2009年2月）

<sup>6</sup> 万城目学「趙雲西航」（「yomyom」vol.13、2009年11月）

<sup>7</sup> 万城目学「虞姫寂靜」（「yomyom」vol.30、2013年11月）

<sup>8</sup> 万城目学「法家孤憤」（「yomyom」vol.31、2014年2月）

<sup>9</sup> 万城目学「父司馬遷」（「yomyom」vol.32、2014年5月）

<sup>10</sup> 森見登美彦に『新釈 走れメロス 他四篇』（祥伝社、2007年）

では、万城目学がこだわった中島敦の『わが西遊記』とは、そして悟浄とは、どのような特徴を持っているものなのであろうか。

### \* 中島敦の「わが西遊記」

万城目学が「著者解題」<sup>13</sup>において、注目するのが、『わが西遊記』の悟浄のキャラクターである。「三蔵法師、孫悟空、猪八戒が流沙河を渡ろうとするとき、川に棲む化けものとして登場するため、日本では『河童』のイメージを付加されることが多いが、水との関係性は特にない。悟空や八戒に比べ、外見の特徴も薄く、三蔵法師に帰依した際に剃髪しているので、実際は『坊主頭の妖怪』というのがもっとも正確な描写になる」<sup>14</sup>。

中島敦が、『わが西遊記』を書くにあたり参考にしたと思われる『絵本西遊記』（有朋堂、1918年）の挿絵でも、悟浄は「坊主頭の妖怪」として描かれている。

孫悟空の孫は「さる」の意味を持ち、猪八戒の猪は「ぶた」の意味を持つ。しかし、沙悟浄の沙は「すな」の意味を持ち、動物を指す言葉ではない。中島敦の「悟浄出世」では、悟浄が三蔵法師の弟子になった場面で、「悟浄は、はたして、大唐の玄奘法師に値遇し奉り、その力で、水から出て人間となりかわることができた」と記し、悟浄が「人間」となったことが明記される。

つまり中島敦が『わが西遊記』で描く悟浄の苦悩は、悟浄が妖怪であったころもそれ以後も、「人間」が持つ苦悩と同等である。悟浄が悟空に対し、「嚇怒はあっても苦悩はない。歓喜はあっても憂愁はない。彼が単純にこの生を肯定

できるのになんの不思議もない」とつぶやくように、悟空は「過去ったことは一切忘れて」しまうため、罪の意識に苦しめられることはない。しかし、悟浄は、「人間」と同じく、苦悩や憂愁や罪意識を忘れることができない。「常に、自己に不安を感じ、身を切刻む後悔に苛まれ、心の中で反芻されるその哀しい自己苛責」によって、日々苦しめられる。「いったい『我』とは何でございましょう」という問いの答えを見つけるために旅を続ける悟浄にとって、悩まぬ悟空は自分とは違う存在としての「歎異」の対象としかかなりえないのである。

一方八戒は悟空を見習い、彼を師として、変化（へんげ）の術を身に着けようとする。うまく竜に変化できない八戒に、悟空は「お前にそれができないということが、つまり、お前の気持の統一がまだ成っていない」と批判する。「そりゃひどいよ。それは結果論じゃないか」と反論する八戒は「これほど一生懸命に、竜になりたい竜になりたいと思いつめているんだぜ」とその〈過程〉を評価の対象としようとする。

これに対し悟浄は、「変化の術が人間にできずして狐狸にできるのは、つまり、人間には関心すべき種々の事柄があまりに多いがゆえに精神統一が至難であるに反し、野獣は心を労すべき多くの瑣事を有たず、したがってこの統一が容易だからである」と分析する。つまり、「人間」である悟浄は、自分にはできないと〈結果〉を予想した上で、はじめから観察者・傍観者を超えないでいる。

### \* 〈結果〉と〈過程〉 万城目学の「悟浄出立」

万城目学の「悟浄出立」は、すでに三蔵法師の弟子となった悟浄らの取经の旅の途中の物語である。悟空がいない間に妖怪につかまってしまった一行は、妖怪の住処で悟空の助けを待つ。この間の悟浄と八戒との会話が物語の中心となる。

「どうしてお前は、こうも毎度、同じ間違いをするんだ？」と、悟浄は八戒の間違い（＝出

<sup>13</sup> 万城目学『悟浄出立』（新潮文庫）前掲。

『西遊記』については、「七世紀、『貞観の治』として知られる唐の太宗の世、玄奘三蔵が天竺すなわちインドを訪れ、多くの経典を持ち帰った。この事績をもとに『西遊記』が成立したのは十六世紀、明の時代になってのことだ」と記す。

<sup>14</sup> 万城目学『悟浄出立』（新潮文庫）前掲。

した〈結果〉)を責める。万城目学の悟浄も、まず、〈結果〉を重視するものとして定義される。「お前だって何が何でもといった態度で止めようとはしなかったじゃないか」という八戒の反論に対し、悟浄が考えるのは、妖怪につかまったことが、自分の「予想した通り」の結末であったということだ。〈結果〉が予想できたから、「何も行動せず、何も発言しない」。観察者・傍観者を超えなかったのである。しかし、〈結果〉がわかっているから何をしても無駄だと思い、〈過程〉をおろそかにするという行為は、例えば「死」を前にしたとき、「生きる」ことの意味が失われることになる。この〈過程〉をおろそかにすることの恐ろしさを、万城目学は次に八戒によって語らせていくことになる。

#### \* 〈過程〉を嫌う 天蓬元帥

悟浄に促されるままに、八戒は、天界の天の川水軍の総帥、天蓬元帥であったかつてのことを語る。稀代の名将が語る勝ち戦の秘訣は、「指揮官の精神を討つ」ことであった。

「たかだか過程——相手の大将の精神を討つ過程のためだけにこんな大勢が集まって、武器を揃え、いかめしい甲冑を纏い、ひたすら殺し合う。無駄の極致さ。」

万城目学の描く八戒は、冒頭場面でも、「過程が重視される行為というものが、どうも苦手なんだな。」「途中の行為なんか、何の価値もありゃしない」と文句を言う。つまり万城目学の八戒は、中島敦の八戒と違い、〈過程〉を否定するものとして描かれる。

しかし、八戒は、「過程を貶し、終着点にのみ唯一の価値を見出す」者に訪れる「悲劇的な結末」を経験する。〈結果〉は常に、次の〈結果〉のための〈過程〉となりうるから、〈過程〉を嫌悪することは、自然、〈結果〉を嫌悪することになっていく。そして「すべての瞬間瞬間が所詮何かの過程にあるような、奇妙な気持ち」にとらわれ、すべてが嫌悪の対象となっていくのだ。八戒は、地上に降りて「怠け者のぐうた

らに成り下がって」しまったのだが、それを、「過程を拒絶したものが行き着く当然の帰結だ」と悟浄に語る。

では八戒は、なぜ、取経の旅(=〈過程〉)に加わっているのか。

彼はそれを「お師匠様たちとともに、旅をしているから」だと答え、仲間を心の抛り所としていることを明かす。さらには、天界と人間界との違いを明らかにする。

天界とは、完成された世界であるから、変わらないことを義務付けられた“絶対”の存在である。しかし、人の世界は未熟である。だから人は成長するし、変化(へんか)する。中島敦が、変化(へんげ)できない「人間」を描いたのに対し、万城目学は八戒を通して、変化(へんげ)はできないが、変化(へんか)はできる「人間」を描いたのだ。しかも、八戒は、確実に変化(へんか)しているものとして悟空の名をあげたのである。「素直に奴を見習ってみよう」という八戒は、「過程こそがいちばん苦しい」ということを知り、「さらには天界と違って、この人間界ではそこに最も貴いものが宿ることもある、ということ」を知っていく。万城目学の八戒は、悟空が〈過程〉を重視している存在であるとして認識するのである。

#### \* 変化(へんか)する

人は未熟だから変化(へんげ)することはない。しかし、人は未熟だから努力して変化(へんか)する。万城目学は、悟空も八戒も「人間」としてとらえ、人間界で共に変化(へんか)し続ける生き物であるとしてとらえた。中島敦は悟浄に、「いったい『我』とは何でございましょう」という問いを与えたが、人間が変化(へんか)し続ける生き物である限り、この答えは出ないこととなる。〈過程〉を嫌悪すれば、変化(へんか)は止まる。行為がなければ変化(へんか)は訪れない。

「ただ、自分が行きたい方向に足を出しさえすればいいんだ」という悟空の言葉や、「少し

遠回りしたって、また戻ればいいんだ」という八戒の言葉は、予想された〈結果〉を受け取るのではなく、〈過程〉そのものを旅の仲間と共に受け入れていく言葉である。

万城目学の単行本初版の帯には、「俺はもう、誰かの脇役ではないのだ」とコピーが書かれた。主役・脇役は、劇の用語である。劇は台詞によって進み、主に人の外側が描かれるため、何らかの〈結果〉を出せないものは主役になりにくい。しかし、文庫になって帯のコピーは、「お前を主人公にしてやろうか！」に変わる。

「主人公」は、小説の用語である。小説は、人の内側を描く。つまり、〈結果〉を出せない者でも、〈過程〉を語る者は、小説の主人公になれるのである。小説において〈過程〉とは〈結果〉を出すためだけにあるのではなく、それ自体に無限の意味を見出せるものであるからだ。ここでは、悟空も八戒も悟浄も、共にその資格を持っていることになる。

### \* 無限の意味

「人間は、努力をする限り、迷うものだ。」<sup>15</sup> というのは、ゲーテ『ファウスト』(第一部 1808年、第二部 1833年)の中の言葉である。中島敦は、「わが西遊記」を書くにあたって、ゲーテやニーチェを参考にしたという<sup>16</sup>。ゲーテ『ファウスト』で、最後に天使たちは、「絶えず努

<sup>15</sup> 引用は、ゲーテ(相良守峯 訳)『ファウスト 第一部』(岩波文庫、1958年)に拠った。

<sup>16</sup> 中島敦は、1941年に、南洋(パラオ)への出張に行く前に深田久弥を訪ね、以下の書き置きを名刺の裏に残している。

「南洋へ行く前に書き上げようと思って、西遊記(孫悟空や八戒の出でくる)を始めていますが、一向にはかどりません、ファウストツアトラストトラなど、余り立派すぎる見本が目の前にあるので、却って巧く行きません。」

また、中島敦は、「和歌でない和歌」の中で以下の歌を詠んでいる。

「ある時は ファウスト博士が教へける「行為(ターゲット)」によらで汝は救われじ」

(『中島敦全集 第二巻』筑摩書房、1976年6月)「遍歴」

」

め励むものを 我らは救うことができる」と、ファウストに救いの手を伸べる。

中島敦の「悟浄出世」では、「時とは人の作用の謂じゃ。世界は、概観によるときは無意味のごとくなれども、その細部に直接働きかけるときはじめて無限の意味を有つものじゃ」と観世音菩薩が悟浄に教示する。

「細部に直接働きかける」ことで、「無限の意味」を得るのは、〈過程〉を重視する生き方である。中島敦が悟浄に託したものを、万城目学はすべての登場人物に託したのだと言えよう。悟浄も八戒も、そしておそらく悟空も、まだ迷い続けている。しかし、迷う事こそが、〈過程〉を大切にしている証拠であり、生きていることの証拠である

「私が書くべきは『沙悟浄が猪八戒を考察する話』」と語った万城目の物語は、未熟な人間が努力して変化(へんか)し続けることの意義を示した。それは、特別な人間のみならず許されたものではなく、すべての人間の営みの上にあるものだ。

さらに、悟浄のような観察者の変化(へんか)の可能性を描いたことは、思索することを得意とする現代の読者の多くにも寄り添った展開となったと言えよう。そしてそれらをさらに推し進めたといえるのが、次に続く、武官・趙雲と文官・諸葛亮とが語り合う物語となる。

### 3. 「趙雲西航」

「趙雲西航」の原典は陳寿による『三国志』<sup>17</sup>であると万城目学は文庫本「著者解題」<sup>18</sup>で解説する。『三国志』は「三世紀、後漢が滅びた

<sup>17</sup> 「三国志」は成立 280年頃、西晋の時代に陳寿によって書かれた歴史書である。陳寿は蜀の第2代皇帝劉禪に仕え、蜀が滅亡した後、西晋に仕えた人物であるため、蜀の歴史にも詳しく、「魏書」「吳書」「蜀書」と三国を対等に扱った。

<sup>18</sup> 万城目学「著者解題」(『悟浄出立』新潮文庫)前掲。

のち、魏・蜀・呉の三国が天下を争った歴史について記した史書」である。その純粋な史書である『三国志』を物語としてまとめ上げた『三国志演義』<sup>19</sup>は「講談ゆえに、おもに蜀を建国した劉備を善玉、魏を建国した曹操を悪玉として描き趙雲も劉備傘下の一武将として登場する。(略)劉備軍を、関羽、張飛とともに支える趙雲は、あまたいる三国志の登場人物のなかでも、特に人気のある武将だ」として、趙雲の人物造形に『三国志演義』が大きくかかわることを述べた。

### \* 赤壁の戦い

「趙雲西航」が発表された前年の2008年に、映画「レッドクリフ Part I」<sup>20</sup>が公開された。『三国志演義』をもとにして、呉と蜀との連合軍が、魏を破る〈赤壁の戦い〉を描いた作品である。冒頭に、趙雲の活躍シーンがある。戦場に取り残されてしまった劉備の赤子<sup>21</sup>を趙雲が単身で救出し、敵の重囲を突破して連れ帰る<sup>22</sup>シーンである。趙雲が最も華々しく活躍する場面でもあり、映画「レッドクリフ Part I」でも趙雲は若々しく非常に魅力的に描かれた。

<sup>19</sup> 万城目学「著者解題」には、「成立は『西遊記』と同じく明代。羅貫中の手によると言われているが、これもまた定かではない。」と説明される。『三国志演義』は、日本では特に江戸初期に受容の記録が多い。日本で完訳された初めての外国小説といえる。

<sup>20</sup> 原題：「赤壁(上)」。監督：呉宇森。アメリカ、中国、日本、台湾、韓国合作映画。

<sup>21</sup> 幼名・阿斗。成人して劉禪となり、蜀の第二代皇帝となる。父は劉備、母は甘夫人。

<sup>22</sup> 万城目学『とっぴんぱらりの風太郎』(前掲)には、その初版本の帯に「その時、1人対10万人」というコピーがある。大坂夏の陣の折、大坂城から秀頼の子をひそかに連れ出して大坂庶民の手に渡した風太郎が、敵味方の軍勢が入り乱れる中を馬で突っ走る状況を指しているが、この場面は、趙雲の赤子救出の場面を思い起こさせる。

「中国では意外や老將軍の印象が強いらしい」<sup>23</sup>が、「近年は日本人が作り上げた三国志の武将像が、特にゲームのキャラクターを借りて本国に逆輸入されているので、これから新しい趙雲像が本国でもかたち作られることもあるかもしれない」と万城目学が解説したように、「馬を駆けさせ、槍をりゅうりゅうとしごき、かつ温厚篤実という、文武に秀でた精悍な將のイメージが強い」日本の趙雲像が、早くもこの映画では選択されていた。「趙雲西航」の前年の公開であるから、「趙雲西航」を手にとった多くの「三国志」好きの読者は、この映画の趙雲の活躍のシーンを目に浮かべながら、物語のページを繰ったことだろう。しかし、万城目学の作品の趙雲は、予想に反して「古い」を感じさせる。しかも、趙雲の活躍として最も印象深い赤子救出の場面は、一切描かれていないのである。

### \* 長坂橋の戦い

万城目学が愛読した、吉川英治『三国志』<sup>24</sup>では、〈赤壁の戦い〉の直前に起こる長坂橋での戦いで、劉備の赤子を抱いて敵の重囲を突破し、無事赤子を劉備の届けた趙雲に対し、劉備は、「趙雲のごとき股肱の臣は、またこの世で得られるものではない。それをこの一小児のために、危うく戦死させるところであった。一子はまた生むも得られるが、良き国將はまたと得がたい」と語ったと記される。趙雲は、「地に額をすり

<sup>23</sup> 万城目学「著者解題」(前掲)には、「劉備亡きあと、人材の枯渇した蜀を諸葛亮とともに支え、何とか守りきる晩年の姿がより印象深いからだろう」と解説される。

<sup>24</sup> 吉川英治『三国志』(「中外商業新報」(現：「日本経済新聞」、1939～1943年)

本文引用は、吉川英治『三国志(五)』(「吉川英治歴史時代文庫37」講談社、1989年)に拠った。

万城目学「序」(『悟淨出立』新潮文庫)に、「中学時代に吉川英治の『三国志』に触れ、加速度的に中学の歴史に興味を抱くようになった」とある。吉川英治の『三国志』は、『三国志演義』の物語も参考にされている。

つけた。越えてきた百難の苦も忘れて、この君のためには死んでもいいと胸に誓い直した。原書三国志の辞句を借りれば、この勇将が涙をながして、（肝腦地にまみるとも、このご恩は報じ難し）と、再拝して諸人の中へ退がったと誌してある」と書かれ、その忠臣ぶりが強調される。

しかし、万城目学作品は、趙雲を主人公にしながら、この逸話がすべて削除される。趙雲が逸話的に最も活躍するのは、この長坂橋であるにもかかわらずである。長坂橋の戦いそのものが無視されているわけではない。張飛については、「かつて長坂橋では、押し寄せる曹操率いる五千の敵軍を、ただの一喝でもって打ち破った。噂では、『張飛一騎は、一万の兵に値する』などと、今でも敵軍の間で評されているらしい」と描写されるのである。

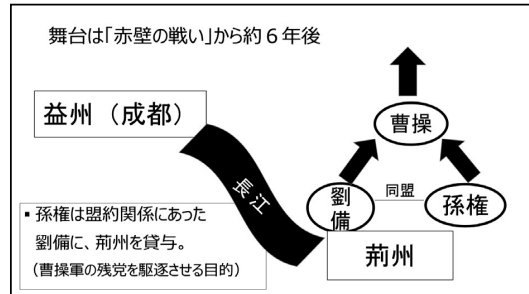
### \* 趙雲の淋しさ

万城目学は文庫本の「著者解題」で、「どれだけ戦場で活躍し、あるじ劉備の家族を命がけで救うことがあっても、劉備・関羽・張飛という鉄のトライアングルに割り入ることはできない趙雲のさびしさ、孤独というものを、物語の行間にふと嗅ぎ取ることもあった」述べた。劉備は、「関羽、張飛と三人で有名な『桃園の誓い』を交わし、義兄弟の契り」を結び、彼らに「絶大な信頼」を置いている。また、「稀代の参謀諸葛亮を『三顧の礼』をもって軍師に向かえ」ている。趙雲は、『三国志』では二十五番目の扱いの將軍である。この趙雲を主人公とした万城目学作品が、「趙雲のさびしさ、孤独」を描くのに、長坂橋の逸話をあえて描かなかったとすれば、そこに潜む趙雲の「さびしさ、孤独」の内実は、どのようなものとして扱われているのだろうか。

### \* 「赤壁の戦い」から約六年後

万城目学作品の舞台は「赤壁の戦い」から約六年後となる。

「呉」の孫権は盟約関係にあった劉備に、荊州を貸与<sup>25</sup>したが、自分の国を興したい劉備は、益州牧である劉璋と戦を起し、蜀の中心地となる成都を獲得しようとしている。その援軍を運ぶため、荊州から船が出され、長江を西に遡る。大将船の第一の船には趙雲と張飛<sup>26</sup>が、第二の船には諸葛亮が乗った。（下図）



趙雲と張飛は「その勇猛ぶりは敵味方の境を越え、もはや生ける伝説として語られるほどである」と紹介されるが、今は戦闘とは離れ、船で移動中の身である。つまり、「どれほど古今無双たる勇将の資質を備えていようとも、この場所で趙雲と張飛にできることは何一つない」状態だ。世間の華々しい称賛と対比される「現在」の彼らは、張飛は痔を患い、趙雲は船酔いに悩まされる日々である。趙雲はさらに、戦に向かいながら、高揚とはほど遠い精神状態にある自分をいぶかしんでいる。

彼らの状態は、彼らの年齢描写をみればさほど不自然なことでもない。214（建安 19）年の彼らの年齢は、次のようにほぼ史実に沿って描かれた。

- 劉備 53歳ごろ
- 関羽 すでに50歳を超えた（武官として仕えて25年）
- 張飛 46歳（武官として仕えて25年）
- 趙雲 50歳（武官として仕えて15年）
- 諸葛亮 33歳（文官として仕えて7年）

<sup>25</sup> 〈赤壁の戦い〉で破った「魏」の曹操軍の残党を駆逐させる目的で荊州は貸与えられた。

<sup>26</sup> 張飛と趙雲とが同船するのは、万城目学の独自設定である。

諸葛亮以外は、すでに壮年を超えている。趙雲は、自身の不快の原因を、「老い」の問題かと疑い、まずは体力的な衰えとつなげて考え、次に精神の積極性の欠如(=臆病)とつなげて考えてみるが、どちらも自身の不快の原因として当てはまらないことに行きつく。

#### \* 文官・諸葛亮

船が錨を降ろし停泊したとき、第二の船に乗っていた諸葛亮に食事に誘われ、趙雲は陸に上がり、彼と話すことになる。

張飛、趙雲、諸葛亮の三人の位置関係は、前作「悟浄出立」の悟空、八戒、悟浄の位置関係と似ている。例えば、張飛がその「巨大な体軀を、ひたすら主君の安全を守ることにのみ使役し」、「その紐帯の強さは、趙雲でさえ割りこむことが憚られるほどの、ときに狂的ともいえる性格を帯び、彼が発揮する蛮勇は実際、幾度となくあるじの命を窮地から救ってきた」ことは、悟空が「岩をも震わすほどの勢いで」お師匠様を助けにくる部分に重なる<sup>27</sup>。悟空と共に戦闘に加わる八戒の位置は、ここでは張飛と共に戦う趙雲になろう。そして、頭の良い悟浄の位置には、文官である軍師諸葛亮が当てはまる。

「悟浄出立」では、八戒と悟浄が身動きできない中で語りあう場面が中心となり、「趙雲西航」では、やはり船旅の途中の中州という、身動き儘ならぬ中で、趙雲と諸葛亮とが語りあう場面が中心となる。

武官である趙雲は、「自らの手が握る槍と、その穂先が接する範囲の内で」物事を信じる人物だ。しかし、諸葛亮は文官である。「諸葛亮はまるで大陸そのものを掌に置き、それを俯瞰するかの如く話をする」。「頭のいい」悟浄と同じく知識を蓄え、情報を整理し、分析する。

「悟浄出立」での悟浄は、自分の価値を十分に

<sup>27</sup> 「粗暴な振る舞いや、ときに見せる必要以上の残忍さ」や「子どものような無邪気さ」を持ち、「子どもが巖の身体を持ってしまった」ようだと言われる張飛は、悟浄が指摘する悟空のあり方に似ている。

理解できていなかったが、諸葛亮は、その自分の価値を十分に理解し発揮する。「机上の空論を弄んでいる」という偏見も、彼がまだ訪れてさえいない蜀の姿を主君に伝え、辺境の地の重要性を一気に明らかにしたことで、評価されていくのである。諸葛亮の生き方は、戦乱の世だけではなく、その後の平和の時代にも通用する生き方なのだ。趙雲はそこに、「明確な時代の変化と、新しい世代が勃興しつつある現実」を見る。つまり、諸葛亮は、悟浄の行きつく先の一つである。それはまた、悟浄と同じ悩みを抱えていた読者(新しい世代)に、時代の変化とそこでの生き方を肯定的に指し示すことにもなる。

#### \* 故郷というもの

「悟浄出立」において八戒は、かつての故郷の天界で、天蓬元帥として活躍した過去を振り返った。「趙雲西航」で故郷のことに思いをはせるのは趙雲である。諸葛亮には、故郷というものはない<sup>28</sup>。生まれ育った場所は、戦禍にまみれ村ごと失われた。諸葛亮は、「未来永劫平和に続く自分の国を、故郷と言え場所を持ちたい」という気持ちを、蜀に賭けようとし、「もう、荊州に帰るつもり」もない。しかし、趙雲には、「常山」に故郷がある。「故郷の存在を人知れず心の隅に置いて生きてきた」。しかも、「いつか華々しく帰還する日を、流浪の軍の一員として劉備を支えながら、待ち望んできた」のである。

趙雲は、遠い地に行くこの船出で、「自分が故郷を完全に失うことを、心のどこかで理解していた」<sup>29</sup>という。趙雲は、八戒と同じく、「二度と戻れぬ場所を心に置」いて「懐かし」む存在なのだ。

<sup>28</sup> 「悟浄出立」の悟浄も、天界で捲簾大将であったころの自分を懐かしむことはない。

<sup>29</sup> 趙雲が、父の葬儀を丘の上から人知れず見送って以後、故郷に帰れないままにいるするのは万城目学の創作である。史実では、趙雲は常山に何度か帰郷している。

だが張飛もまた、諸葛亮と同じく、過去の故郷に思いを残さない人物であった。「あんなところが懐かしいわけがないだろう」。「俺の故郷は、言ってみれば、家兄よ。」と語る。ここには、悟空の三蔵法師への思慕と同様の思いがみられる。

趙雲の「さびしさ、孤独」、そしてかすかな不快は、諸葛亮や張飛の故郷のあり方に向けられている。「彼らにとっての大事は、自分が現在立つ場所でも、歩いてきた道でもない。明日から自分を支える心がどこにあるか、その一点にある」。趙雲は、彼らが未来に向けて「これから心を置くべき場所を見つけることに成功した」ことを、つまりは彼らが自身を変化（へんか）させたことを知るのである。

人は未熟だから変化（へんか）すると「悟浄出立」は語っていた。しかし「趙雲西航」の趙雲は、「今さら、新たな生活習慣を受け入れるには、彼の『形』というものは、あまりに強固に完成されてしまって」いるという。すでに壮年となった趙雲には、変化（へんか）すること自体が難しくなっているのである。そして趙雲の心の痛みは、「親不孝の極みを尽くした我が身を、二度と戻ることのない息子を、母はゆるしてくれるだろうか？」という思いに帰結する。親と子とといった感情のしがらみが誰よりも強くあった趙雲にとって、故郷への思いは、変化（へんか）の対象とはなり得ない。あの長坂橋の戦場で、劉備軍と共に逃げる民を守ることも、自分の命よりも、「子ども」の命を優先したのは、趙雲が親子や家族といったしがらみを強く感じる人物であったからだろう<sup>30</sup>。

「趙雲西航」には、趙雲の長坂橋のエピソードは削られた。だが、万城目学の趙雲は、あくまでこのエピソードに沿った形で描かれているのだ。趙雲の故郷は常山である。しかし正確に

は、彼の母が彼の故郷なのだ。母に許されるということが、変化（へんか）することが難しくなった彼の唯一の心の拠り所となっているのである。

万城目学は、デビュー後、『悟浄出立』を発表するまで、関西という地域に多くこだわり、作品を紡いできた作家である。そしてまた、その折、それぞれの土地とともに描いたのが、その土地に住む親子や家族の絆であった。例えば、『プリンセス・トヨトミ』<sup>31</sup>では、大阪国の謎が、代々父から息子へと伝えられることで彼らの絆を深めていたし、『かのこちゃんとマドレーヌ夫人』<sup>32</sup>では、ペットをめぐる家族全員が「古い」の問題を考えていた。『偉大なる、しゅららぼん』<sup>33</sup>もまた、琵琶湖周辺で先祖代々伝えられる不思議な力が家単位で守られていく物語である。『とっぴんばらりの風太郎』では、豊臣秀頼とその家族は、子どもを大阪城から逃がす折、この子が大阪の市井の子として育つことを願った。

地域作家としての万城目学は、多くの場合、彼らの活躍の場をその土地や家族に結び付けることで、心の拠り所を用意していたといえる。しかし、『悟浄出世』の五篇の短編小説の発表をもって、彼が小説の舞台を、関西の実際の土地から、世界に広げ、架空の都市へと広げたのは、「趙雲西航」を含むこれらの作品が、故郷たるもののあり方を再考し、再構築した所以ではないか。

故郷喪失という言葉が、平成時代以降に関西地方で深刻な問題となったのは、1995年の阪神淡路大震災であろう。多くの人が住む場所を、故郷を失った。さらに、この出来事の傷跡がようやく癒えはじめた2011年に起こった東日本

<sup>31</sup> 万城目学『プリンセス・トヨトミ』（「別冊文藝春秋」、2008年1月～2009年3月）

<sup>32</sup> 万城目学『かのこちゃんとマドレーヌ夫人』（筑摩書房、2010年）

<sup>33</sup> 万城目学『偉大なる、しゅららぼん』（「小説すばる」2010年5月～2011年4月）

<sup>30</sup> 子どもの命を優先するという行為は、当時の歴史において、子どもの人権がなおざりにされたことを思えば、なお一層特徴的なことであった。



大震災は、再び日本中に故郷喪失の痛みを感じさせることとなった。

実際に多くの故郷が無残に失われていく様を経験しながら、人々はこれまでの地域に根差した故郷に代わる心の拠り所を、諸葛亮や張飛のように、未知の空間や他者の心の中にも求めていくことになっていったと言えるだろう。

そして、これらの新しい故郷、つまりは心の拠り所を、他者の心の内に置くことの意味を再考察したのが、次の「虞姫寂靜」の物語となる。

#### 4. 「虞姫寂靜」

「虞姫寂靜」は、いわゆる「四面楚歌」にあたる夜が舞台となり、項羽の最後の出陣前の夜の宴での、虞美人自害の場面が描かれる。

司馬遷によって編纂された歴史書『史記』の「項羽本紀」に残された虞美人を説明する記述は、「有美人名虞 常幸従（美人有り名は虞、常に幸せられて従ふ）」というたった一行で、項羽が最後の出陣前の酒宴で自ら詩を作り、「虞兮虞兮奈若何（虞や虞や若を奈何せん）」と歌い、虞美人がこれに和したことだけが記されている。

謎に包まれた生涯ゆえに、京劇『霸王別姫』<sup>34</sup>をはじめ、虞美人は、これまでにさまざまな物語を生み出してきた。万城目学が愛読する<sup>35</sup>司馬遷の『項羽と劉邦』<sup>36</sup>では、「虞兮虞兮

奈若何」と歌われる中で「兮」が連呼されることは「作り手の項羽の激情」の表現だとし、「この世にお前をのこすことだけが恨みだ」、「つまりは、死んでもらいたい」と願ったのだとした。だから司馬遷の作品では、虞美人は自害するのではなく、項羽によって一刀のもとに切り下げられ、さらにとどめを刺される。

万城目学もまた、大胆な展開を用意する。万城目学の虞美人は、項羽に滅ぼされた秦の国の女で、すでに亡くなっていた項羽の「虞」という名の正妃<sup>37</sup>の身代わりとして、同じ「虞」の名を与えられて愛された女として登場する。「虞姫寂靜」の虞美人が身代わりとして愛されていたと知るのには、項羽が最後の出陣と死を決意した「四面楚歌」の夜のことである。すでに項羽によって故郷を滅ぼされていた彼女は、今さら、自由に逃げると解放されても戻る場所もなく、「虞として生き」「虞として死ぬ」ほかはない。故郷喪失後、項羽という人間だけを心の拠り所にして生きていた彼女にとって解放は、第二の故郷喪失にあたる。

「四面楚歌」で敵陣から流れてくる歌は、項羽の故郷、楚の国の歌である。味方の裏切りを示唆する場面であるが、同時に、項羽が二度と故郷に戻れないことを悟った場面ともなる。万城目学は、さらにこの曲の歌詞内容を項羽自身によって明らかにさせた。「楚にいる年老いた母が、妻が、我々の帰りを待っている、という歌だ」。項羽にとっての故郷は、楚という土地というより、「母」や「妻」といった人を指してしているのが分かる。

この歌詞は、項羽の故郷喪失を強く印象づける。また「年老いた母」が帰りを待っているという部分は、前作「趙雲西航」の趙雲の故郷への思慕を思わせる。そして「母」とともに「妻」が項羽の帰りを待っているのだとすれば、この

<sup>34</sup> 中国の京劇の代表的な演目。1930年頃北京で初演。項羽が劉邦の大軍に垓下で取り囲まれ、最期の宴を催した際に、そこで虞美人が劍舞を披露した後、自害するさまを描く。1993年に、『霸王別姫』を演じる京劇俳優を描いた『さらば、わが愛/霸王別姫』（中国・香港・台湾合作映画）が公開されて話題を呼び、2023年には4K版が公開されている。

<sup>35</sup> 万城目学「『花神』について」（「小説すばる」2010年2月）には、本棚に司馬遷の作品がほとんど揃っていて、その中に『項羽と劉邦』があったことも記されている。

<sup>36</sup> 司馬遷『項羽と劉邦』（「小説新潮」1977年1月～1979年5月）本文の引用は、司馬遷

太郎『項羽と劉邦（下）』（新潮文庫、1984年）に拠った。

<sup>37</sup> 司馬遷『史記』にも、司馬遷の『項羽と劉邦』にも、項羽に正妃がいた記述はない。

「妻」は項羽の正妃を指すことになる。すでに正妃は亡くなっているのだから、彼女は死後の世界で項羽に会うのを待っていることになる。

「虞姫寂靜」の項羽は、虞美人を解放した後、正妃の形見と共に陣出、最期を飾ろうとしていた。ここに日本文化的な解釈を加えれば、形見との心中、死後の世界でともに生きようとする儀式的な思惑が想定できる。

「虞姫寂靜」の虞美人は、秦の国を滅ぼされることで土地としての故郷を失った。次に彼女は他者の心の内に故郷を見出そうとして項羽に寄り添ったが、その身を解放されることで、再び故郷を奪われた。だからその彼女が次にとった行動は、自ら酒宴に赴き、奪われた二番目の故郷を、寄り添った他者の心を取り戻すことであつたのだ。

虞美人は、自ら赴いた酒宴の席で、正妃の形見を借りて身に着け、勝利を祈る剣舞を披露する。それを見た項羽は、彼女に「虞や」と呼びかける。それが正妃ではなく自分の名として呼ばれたのを確認した彼女は、「名を取り戻した」その瞬間に、素早く首筋に刃を当て、止めようとする項羽の目の前で、躊躇することなく真下へ引き落としした。

このことで歴史は、正妃の存在を忘れ、彼女を、項羽に愛された虞美人として留めたというのである。同時に、項羽の心にも、伝え聞いた正妃の死より、目の前で自害した虞美人の死をより強く宿らせることができたと言えよう。

虞美人の常の覚悟は「男は最後まで武人としての誇りを失うことなく、その生を全うするだろう。ならば己も、この世でただひとり霸王に愛された女として、跡を濁さず去るのみ」ということであつた。虞美人はその覚悟を貫くとともに、項羽の中に自分の居場所を取り戻したのである。

項羽は死後の世界で正妃に会うつもりであつたのだろうが、項羽より先に虞美人が死後の世界に飛び込んだため、項羽が望んだであろう、形見を介した正妃との心中は成就することはない。

死後の世界で項羽を待つのは、正妃だけではない。虞美人もまたそうだからである。

しかし、「虞姫寂靜」の虞美人は死後の世界を抜け、静かに輪廻転生をする。

「すらりとした茎から、可憐に咲き誇る真紅の花弁は、女が最後の舞いのために纏った深衣のようでもあり、女があの日、流した血のようでもあり、その草花は誰言うもなく、虞美人草という名で呼ばれるようになった。」

虞美人は花に生まれ変わることで、死後の世界の愛憎関係から離脱した<sup>38</sup>と言えよう。

## 5. おわりに

故郷とは「心を置くべき場所」である。ここで取り上げた、万城目学の『悟浄出立』の三作品は、いずれも故郷喪失者の物語であつた。そして彼らがもつめた「心を置くべき場所」は、土地ではなく人の心であつた。

彼らが求めたのは、同じ時を生きる者の心であつたが、続く「法家孤憤」では、「心を置くべき場所」を未来へ続く法の精神に定め、「父司馬遷」では、「心を置くべき場所」を遠い未来の読者へ定めることになる。

趙雲が、「新しい時代を認め、若い価値観を理解した」ように、『悟浄出立』の五篇の小説は、過去を舞台に、未来へと繋がる人の心を重視した歴史小説の形を示していくことになる。そしてそれは、万城目学の作風の変化を予感させるものともなつた。万城目学の小説は、これ以降、舞台を関西の実際の土地から、世界へ、架空の都市へと広げていく。それは、『悟浄出立』の五篇の小説が、故郷たるもののあり方を再考し、再構築しえた所以であろう。

<sup>38</sup> 日本では、「蘆屋処女」の伝説（「万葉集」、「大和物語（生田川伝説）」、能「求塚」に登場する伝説）のように、死後の世界でも生前の三角関係による愛憎関係が続く様子が描かれることがある。